

平成 19・20 年度 JSL カリキュラム実践支援事業実施報告書【授業実践】

実施団体名【 北九州市教育委員会 】

1 学習活動の実際

(1) 学習指導要領での指導学年と領域 第3学年 英語科	
(2) 単元名 「Unit 6 20 th Century Greats」(New Horizon English Course 3)	
(3) 対象児童の実態 (1 人)	
A 児	第3学年 国籍 (中国) 母語 (韓国語) 在籍年数 (3)
	<p>・日本語の力 来日後に日本語学習を始めてから、約1年で日本語検定3級程度の日本語力を身に付けた。しかし、在籍学級での授業を理解するための日本語力までには到っていない。したがって、継続的な日本語学習とともに、教科学習を支援するための取り出し指導が必要な生徒である。</p>
	<p>・在籍学級での学習参加の様子 韓国語を母語とし、第二言語として中国語を話す。英語は中国である程度学習しているが、その際英語学習に対して苦手意識を抱いていた。来日して、日本語で英語の授業を受ける、つまり第四言語である日本語を使って第三言語である英語を学習することに、ストレスを感じている。中級程度の日本語力が獲得できてからは、週に2時間の英語の取り出し指導を実施している。</p>
	<p>英語の学習実態としては、短時間で日本語表現や英語表現を暗記できるものの、十分に理解せずに機械的に丸暗記している場合がある。そうした際は学習内容が十分に定着していない。理解力にも長けた生徒であるため、日本語、英語両方の基本的な構造をしっかりと理解させることで、英語学習における応用力が高まると思われる。そのために、スモールステップ化した支援を行いたい。</p>
<p>・学習環境 教科学習を支援するために、週に6時間の取り出し指導（日本語3時間、教科3時間）を実施している。教科指導では、JSL 英語2時間と社会・理科・国語の先行指導を1時間実施している。</p>	
(4) 目標	
◇【教科指導の目標】	
<ul style="list-style-type: none"> ・関係代名詞 who (主格)を用いた文の形・意味・用法を理解し、英語で表現できる。 ・関係代名詞 that [which] (主格)を用いた文の形・意味・用法を理解できる。 	

◆【日本語指導の目標】

- ・日本語の学習で学んだ名詞修飾節を整理する。(理解支援)

2 学習活動

指導者 帰国・外国人児童生徒教育専任教員			
全体の時間数 (5 時間)			
学習活動の状況, 指導内容	活動 方法	指導上の留意点	有効だった指導等 ◇教科指導について ◆日本語指導について
①復習 英文・日本語暗記 ドリル	取り出し	・英文・日本語の基本例文を暗記させる。時間を区切り、集中して取り組めるようにする。	◇毎時間同じ教材を使用し、音読を何度もすることで、英語学習へのレディネスを高めることができた。 ◆機械的に暗記することで、日本語も抵抗なく早く音読できた。
②導入 友達のことを日本語 (名詞修飾節) を用いて説明する。		・中国人の友達の写真や、地図を使用することで生徒のエスニシティを尊重しながら学習意欲を高める。	◆プレゼンテーションを効果的に活用し、2文が1文になるイメージを視覚的にとらえることができた。
③ルール of 定着 名詞修飾節の概念を理解する。		・パターンプラクティスを通じて関係代名詞の用法を定着させる。	◇プレゼンテーションを効果的に活用し、英語の2文が1文になるイメージを視覚的にとらえることができた。 ◆日本語と英語を繰り返し教師の後について言わせることで、日本語と英語の語順が逆になることに気付いた。
④ルール of 定着		・ワークシートを用いて、英語と日本語を記入し、その定着を図る。	◇センテンスカードを色分けし、視覚的に文構造を理解することができた。
⑤ルール of 運用1 ワークシート		・中国や韓国の人物を扱い、エスニシティを尊重する。 ・文章を厳選し、基本文のみをしっかりと定着させる。	◇何度も発話したセンテンスを書いてみることで進出表現を定着させることができた。 ◆日本語と英語の語順の違いに気を付けて訳すことができた。

<p>⑥ルールの運用2 ジャバディゲーム(単語をジャンル別に配列し、ジャンルを選んで問題に答えるクイズ)</p>		<p>・難易度を変えたり、表現方法(英語, 日本語, 聞き取り)を変えることで本時の総復習から発展学習までバリエーションをもたせる。</p>	<p>◇ゲーム的要素を取り入れたことで、意欲的に英語で表現しようとしていた。 ◇歴史上の人物を取り入れるなど、教科を超えて日本や世界の文化をも学習できた。</p>
--	--	--	---

3 成果

①対象生徒に対する成果

英語の授業に対して苦手意識を抱いていたが、通常理解が難しいとされる関係代名詞を先行授業で扱い、理解・定着を図ったことで、在籍学級での授業にも積極的に参加することができた。また、授業内容もよく理解し、定期考査での点数も向上した。

②その他

授業を参観していた他校の先生方も、JSL 理論や、英文暗記ドリルを一般生徒や分かりやすい授業づくりに応用できそうであると関心を示していた。

年度当初、校内研修でJSLカリキュラムを全職員に紹介した上で、今回の授業案を配布した。当日は数名の先生が参観して、生徒の頑張りを目の当たりにして、JSLに興味・関心をもったようである。その後も対象生徒や授業についての情報交換が盛んになるなど、日本語指導についての共通理解や関心が職員間で高まりつつある。

4 課題

○毎日の授業に還元できるよう、いつでも誰でも参考にできるような実践事例やアイデアを数多く残し、校内の他の教員の啓発をさらに進めていく必要がある。

○JSL 英語は、あえて日本語を使って英語を教えるという点で、学習者にとってはかなり抵抗感がある。(第三言語を第二言語を使って学ぶことになる) このため、学習内容のかかりの Slim 化と授業で紹介する語彙を厳選する必要がある。